

氏 名	吉 村 典 子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 乙 第 96 号
学位授与の日付	平成 13 年 3 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	ヴィクトリアン・タイル研究 —イギリス19世紀後半の住宅デザイン形成期にみるタイルの意義—
審 査 委 員	(主査) 教 授 太 田 喬 夫 教 授 大 橋 良 介 教 授 河 邊 聰

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は5000年以上もの長い歴史を持つタイルの中で、近代における一時代を形成したヴィクトリアン・タイルの研究である。19世紀後半のイギリスでは、中産階級が住まいに豊かさや自らの生活スタイルを求め、それに答えるように建築家やデザイナーも、さまざまな住空間の表現を試みていた。その中でタイルは、住宅の要所に、しかもさまざまな装飾法を持って取り入れられた。本論文は、ヴィクトリアン・タイルが住空間形成にどんな意義を有していたかをさまざまな視点から考察しようとした。

本論文は、序論と第1部、第2部、そして結論から構成されている。序論では上に述べた研究の目的と先行研究について、またヴィクトリア時代の社会背景について述べられている。

第1部において、先行研究にみられるタイルの製造内容からの考察をより緻密に行った。そして第2部で、これまで考察対象とされてこなかった受容におけるタイルの特性と意義とを明らかにした。受容の側から住宅デザイン形成の過程をタイルという素材から明らかにしようとした。

第1部「ヴィクトリアン・タイルの製造活動」では、まず、当時の100社以上のメーカーを製造内容から5つのタイプに分けた。ひとつは、大規模生産型の大手タイル・メーカーで、量産化を進めながら、1870年代からは、表面の装飾において少量生産の差異性のある商品も作り出した。二つ目は、大手メーカーの地方の代理店兼装飾工房で、メーカーから素地を購入し、施行場所や地域の固有性を出す装飾表現を展開した。三つ目は、素地から表面の装飾に至るまで独自の手法で手作業に基づいて製作したウィリアム・ド・モーガンの工房である。彼の工房は、新しい造形感覚を打ち出していこうとする精神を具体化している点に大きな特徴を持つ。四つ目は、オランダ製の素地を使って手書きのタイルを制作したウィリアム・モリスの工房である。モリスらは、手書きの美を最大に引き出し、住まいと住み手の関係を表わすような装飾で、生産から施行まで共同で作り上げた。五つ目は、オランダのタイル・メーカーおよびイギリスの代理店で、それらのタイルは、イギリスでの流行を捉えながらも、伝統様式である「ブルー・アンド・ホワイト」を維持しながら、エキゾティシズムとシンプリシティの二側面をイギリスのこの時代の住まいにもたらしした。

本論文は、2つの大きな波が形成されたことを明らかにした。そのひとつが、1860年代である。メーカー数が急増し、タイルのデザイン内容もこの時期から一変し、文様の種類や表現が多様化した。もうひとつの波は、1900年前後である。タイル・デザインにアール・ヌーヴォー様式が現れ、大手メーカーのカatalogには、この様式を表わしたおびただしい数のデザイン例が掲載されていた。

ではなぜ住宅空間とタイルが関係するのか。それを考察したのが、第2部の「中産階級の住まいとヴィクトリアン・タイル」である。タイルは、特に中産階級の住まいによく使用され、第1部で分類したタイルの各タイプは、中産階級の中の各層—上層の中産階級・中層の中産階級・下層の中産階級—との間に特

有の関係が見いだされる。また、それぞれの趣味や志向との間にも関係性が観察された。こうした点を詳細にわたって考察したのが、13件の事例研究である。これは、実際の受容をめぐっての検証であり、本論文の中心をなす。この事例研究により、タイルは、住宅の主要な空間を形成し、タイルのデザインをも高めたことが明らかにされた。

一方、住宅には当時、「色」、「明るさ」、「清潔さ」、「趣味性」、「パーソナリティ」が求められていた。ヴィクトリアン・タイルの時代に開発された光沢と発色効果の高い釉薬が、住まいに明るさと色彩をもたらし、耐火、耐水、耐久性の強いタイルの特性が、清潔さを保ち、保護する役割を果たしたことがあきらかにされた。また、当時、タイルは、家庭の装飾材として推奨され、「アット・ホーム」や「家」らしさを喚起させる素材であったことが、当時の室内装飾教本の分析から明らかにされた。

このようにヴィクトリアン・タイルのもつ特性が、住宅に対する理想やイメージと合致し、具体的な空間づくりを可能にしたのである。そこにこのタイルの受容の意義がある。かつては風土や宗教との関連が強かったタイルに、住空間形成のなかで、タイルの新たな創造的表現力が見いだされたのであり、そこでは極めて多様な文様表現が可能となり、いかようにも空間を構成しようという特性が見いだされたのである。

結論では、これまでの成果のまとめと今後の展望および課題が述べられた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ヴィクトリアン・タイル研究において以下の点で独創的なすぐれた成果を得たものとして評価することが出来る。

まず、申請者による長年にわたる緻密な現地でのフィールドワークによって、当時のタイル・メーカーのカatalog類や住宅の空間形成の実態が綿密に明らかにされた点を挙げる事が出来る。また、とくに実際に住宅に住む中産階級の人々の住宅についての意識を当時の室内装飾関係の出版物および絵画などの調査によって、明らかにした点もあげることができる。

さらに13にのぼる事例研究の中で、特に集合住宅とタイル装飾との関係が問われ、テナントという集合住宅の事例において、タイル装飾が、共同通路に施され、中産階級の住宅イメージを顕著に表わしているという指摘は、独創的で説得力が見られる。

1860年代から70年代にかけて、ウィリアム・モリスとその仲間たちは、物語の名場面やその登場人物を描いたタイル・パネルを制作したが、この場合には、商会は、住人と住宅との関係や施行場所との関係でタイル・パネルをデザインしたということを明らかにした点も評価できる。

本論文の内容は、申請者単著の以下の論文において公表されている。

- (1) 吉村典子「イギリス 1870/80年代のタイルにおける唯美主義」美学学会誌『美学』第47巻第187号24頁－35頁、1996
- (2) 吉村典子「イギリス19世紀後半の美術陶器運動—ミントン社の美術陶器製造を通して—」意匠学会誌『デザイン理論』第36号29頁－42頁、1997
- (3) 吉村典子「タイルによる通路装飾ワリー・クロースについて—集合住宅における近代装飾タイルの—様相」意匠学会誌『デザイン理論』第33号15頁－28頁、1994